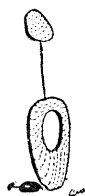


幼 児 と 歌



岡 弘 美

一方、音楽教育における評価として、(a)歌唱表現、(b)器楽演奏、(c)創作力、(d)読譜力、(e)リズム反応の五つを挙げ、こうも言っている。

「作曲活動が中心だが、小学校程度の過程ではもっと広い意味の自由表現全体を指導するのが本来のあり方である。したがって学習した歌曲をすっかり自分のものとして、その歌にふさわしく解釈し歌う能力、器楽曲やその他の曲想に合うように演奏する能力、日常会話に用いることばや、呼び声などを旋律にしてみる能力」

私は、幼児においては特に、この最後の部分をもっと重視すべきだと思ふのである。

米国の幼稚園における幼児教育の指導書をみると、非常に具体的に、幼児の独創歌の指導が書かれている。

その一例を次に挙げると、

。ほとんどの子ども(米園)たちは、自分の歌を人前で歌いたがる

子どもは、話す以前に歌い出す。

私は三才児を六カ月間 観察し、その独創による歌の録音記録を取ることによって、幼児のもつ音楽と、その指導方法について考えてみた。

兼常清佐氏は「音楽の芽ばえ」の中で、音楽教育として、

(一)作曲、(二)自由な歌い方の工夫、(三)自由な演奏、としている。

あげた。譜(1)

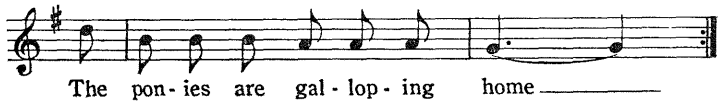
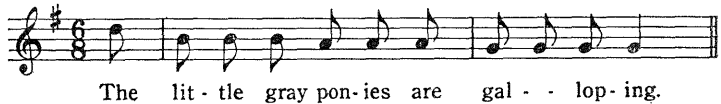
五才児のMは、そのクラスの子どもたちに、右の歌をうたって

ものである。

譜(一)



譜(二)



幼児の創造する歌が果たして助長されるべきものか、または、幼稚なものとして、そこから早く脱却すべきしるものであるかは、誰も何とも言っていない。しかし、あの三才児の観察が示した、当然に

整然とした一部形式をなしている。
子どもたちは、遠足とか、動物園とか、何かすばらしいところから帰ってくると、よく、独創に依るリズムとメロディの歌をうたうものである。新鮮な経験が子どもに独創的な歌をうたわせるのかもしれない。
一人の子どもの作った歌をすぐ、黒板に記しその子どもに皆の注意を引き、まず、その子どもに皆の為にうたってもらい次に皆でうたう。
子どもが作ったリズムに旋律をつけさせる。リズムは拍手でも、太鼓でもよい。メロディは、歌声、旋律ができたら歌詞を次々に作ってゆく。そのようにして出来た歌が、譜(2)である。
日本においては、次のようなことがしばしば見られる。幼稚園なり、保育園に入る前は、よく自分で作った歌をうたっていた子どもが、入園すると、すぐ、そういう歌が消えてしまし習ったものばかり歌う。中には、習った歌さえも家では歌わない。いわゆる、歌を忘れた子どもがいるということである。

あふれ出てくる豊富な獨創性、歌が行動の大部分に伴っているあの生活を考える時、幼児の獨創歌を助長しないまでも、もう少しそれを問題にすべきではないかと思われるのである。

ここで、入園と同時に、獨創歌がなくなる、すなわち、歌のほどばしりが止まるという事実の動機・原因を考えてみると二つの事が考えられる。

1. 自我意識の發達の結果 2. ぬり絵式音楽教育の結果

関計夫氏が「児童文化と生活指導の心理」の中で、「概念くだけき教育」の必要を述べている。それは主に絵画に關してのものである。

すなわち、幼児期には、自己中心主義であるがために自分の創作活動の結果に対し無批判、無反省でいられる。ところが児童期にはもはや幼児期の感性には自我の發達の為に信頼できなくなり、概念的なものを求める。子どもは何か巧い。つづり方を書いたり、きれいな歌をうたったり、良い絵をと思う。そのような固定概念をこわして、へたでも思いのままのものを屈たくなく書かせるためには、概念的なつづり方と、具体的なつづり方を示して比較させ、良いつづり方は、きれいにまとまったものでなく、ありのままに生活をつづったものであることを知らせるなどなど。

このような考え方を、そのまま幼稚園児の音楽教育にももって来ることができないのではないだろうか。幼児の音楽における概念く

きである。

もちろん、獨創的または創造的なものは、やはり、経験が先行して始めて生じてくる。無からは何も生じない。二つの異なったものが結合してどちらにも備わっていなかったような性質のものが生まれてくる、これが創造だろう。

経験の模倣や繰り返しのみでは、創造ではない。しかも創造のものには、経験が必要なのだ。故に創造性の助長には豊かな音楽的体験が重要なことは言うまでもない。

次に参考までに、二才八カ月の時と三才二カ月目の歌の分析の要約をする。

〈二才八カ月〉

。歌われた音域 完全五度



。音の移動 二度音程……長二度、短二度。

三度音程……長三度、短三度が多い。

。全体的な調子は、短調を感じさせ、同じ高さの音をつづけて歌い時々その後で二度から三度の高低を上下して、突然五度上ったり下ったりする。歌詞は全く意味のない音声の連続で、時々、一つの単語らしき形をなしたものがあらわれる。例えば、ひる寝の

時、外で雨の音がはげしくなり出すと、

アメニヌレテイタシノネイタシと歌う。

全体をどうして、本人にとつては、意味をもっているとも思われる箇所もある。使われた音はタ音が最も多く次にア音が多い。独創的な歌は、朝、目のさめた時、便器にかけている時、遊びながら（二人遊び）、特に昼寝前、床に一人が入っている時にもっともよく現われる。絵本をみながらも歌う。

△三才二カ月目▽

音域 九度



移動 六度ないし五度



。六カ月前のように、二〜三度音程を上下にくり返す移動の仕方は少なくなり変化に富んできた。

既製のメロディと歌詞と自作とのアレンジ形式で長い歌が作られているこのメロディとリズムが、いろいろに少しずつ変化して、変奏曲のように最後までつづく。



例

歌詞は、やはりTVの歌のおばさん「遠い山からとんで来た」が主になり、それに勝手に、いろいろと文句をつけ足している。六カ月と同じく目に映ったものを歌に取り入れて行く。

(イ)は、絵本のトンボを見て歌ったもの。また、さしみが食卓に並んだの

(イ)



(ロ)



をみて(ロ)のように歌う。意味のある語句が多く

なっている。しかし、まだ、全体として一つの筋を通してはいない。六カ月前のもののような短調の感じはなくなり、全体的に、まとまりをもち快活なものになっている。

シンコペーションを多くもちいる。リズムにも変化ができ、音の動きも大きく変化に富んで来た。音は多種になり中でも、マ、ニ、ネが多く使われている。

* * *